

## 県立高等学校みらいのあり方検討委員会（第 1～3 回）意見概要

## 【第 1 回：新たな時代における本県の高校教育のあり方】

難しい課題に直面しても諦めず、自分の力で他人に助けを求めたり、技術を使って課題を解決していくことを訓練できるようにすることが必要。

ものを考えて解決するための方法を体験的に学べるようにすることが必要。

知るだけでなく実際の経験を積むことを重視した学びにしておくことが必要。

様々な会社を知り、就職する会社をよりイメージしやすくなるよう、より多くの職場体験を得られるようにすることが必要。

挑戦することをとおして、成功や失敗を経験する中で力を身に付けていけるようにすることが必要。

失敗してもその先の改善を考え、何度もチャレンジできるようにすることが必要。

年上だけでなく年下の子どもとの交流を持つなど、その場にあわせた様々な役割を経験できるようにすることが必要。

学ぶことを楽しんだり生きることを前向きに考えたりできるような、生きることの根幹を感じられるようにすることが必要。

就職か進学かだけではない様々な生き方があるということを学べるようにすることが必要。

「答え」はひとつでなく、今立っているところにも必ず「答え」があるということを学べるようにすることが必要。

子どもたちが将来を具体的に思い描けるよう、オンラインも活用しながら、大学や社会で活躍している先輩、生徒のロールモデルとなる人物との交流を持てるようにすることが必要。

様々な人と接する機会を多く持ち、人と関わる中で小さな成功体験を積み重ねていけるようにすることが必要。

学年に捉われることのない一人ひとりの育ち・成長に応じた学びができるようにすることが必要。

文章や情報を正確に読み解く力、コミュニケーションする力といったこれからも変わらず必要となる力を身につけられるようにすることが必要。

日本人・外国人の区別なく、互いを理解し、互いにに関わり、文化の違いを肯定しあえるようにしていくことが必要。

外国人の子どもたちが自信を持ち、自己肯定感を育めるよう、高校でも日本語指導や勉強の遅れをフォローするなどの支援が必要。

外国人生徒に係る特別枠入学者選抜の要件から外れる子どもが高校入学のための勉強ができるような場が必要。

テストの成績などひとつの基準ではなく、様々な面で一人ひとりを肯定でき、自分を肯定する力を自分自身でも他人からも育てられる場としていくことが必要。

一人の人間として先生や友達から支えられ自分もがんばろうと思える「居場所」としての高校としていくことが必要。

生徒における建設的なディスカッションやグループワークを引き出し、リードできる力量を持った教員の養成が必要。

教員自らが興味を持ち外部の人とのつながりを持つことが必要。

一人ひとりの教員がやり方や形の画一化に陥ることなく、生徒の興味や関心を引き出し、生徒一人ひとりにあわせた個別最適な学びが実現していけるようにすることが必要。

どこの高校でも同じことばかりやるのではなく、学校ごとに目指すところを明確にし、中学生が自分に合った高校を選択しやすくできるようにしていくことが必要。

新たな時代の学びに向かう学校を支えるための教育委員会・教育行政のあり方を考えていくことが必要。

## 【第2～3回：新たな時代に対応した高等学校教育の推進】

### （実社会とつながった学びの推進）

エビデンスに基づくことは大切だが、「客観的に数値化できるものしか意味がない」「定量的なものが重要で定性的なものは過去のもの」という見方はやめるべきだろう。一方で、定性的なものを感覚的ではなく、納得感ある形で評価する方法を考えていく必要がある。

近畿北陸のSSHの学校連携のような取組を広げていけるとよい。県外の広い地域と関わることで三重県の取組の良さや課題が見えてくる。

四日市工業高校のデュアルシステムは、企業側は学校の授業の中で事前教育をスタートでき、学校側は生徒の採用につながる信頼関係を企業との間に構築できるなど、双方にwin-winの取組である。メリットを企業に伝えられるとこうした取組は広がっていくだろう。

工業高校だけにとどまらず、普通科をはじめとするすべての学校においても、企業に関わってもらいながら探究活動を進めていくことができればよいだろう。

これからは大人も学び続けることが必要となる時代であり、生徒と対等な関係であるというマインドも持ちながら取り組んでいくことが必要だろう。高校生としても先生に代わって企画したりアポを取るなど、自分たちの学ぶ場を自分たちで作るということをしていけると良い。生徒の可能性を周りの大人が信じて閉じ込めないことが大切である。

高校生は「小さな大人」であり、「大きな子ども」のままにしておかないという意識が全ての高校において必要である。高校のレベルや個々の生徒の成績から「この学校・生徒はこれができる・できない」「この学校・生徒はこれくらいで良いだろう」といった判断をするのではなく、生徒を主語にして学校を作っていくことが大切である。

デュアルシステムや地域課題解決型学習をしていく中で、自分に何が足りないのかを生徒自身が実感した時こそ学習のモチベーションが上がる。一方で、多忙な教員に限られた時間の中でこうした取組を行っていくのは大変であるため、やらなければならないことに集中できる仕組みを考えていく必要がある。

例えば、各学校がYOUTUBEチャンネルを持ち、生徒が発信者としてインターンに行った店について情報発信していくことで、生徒は地域のこと社会のことを学ぶことができ、店は自らを宣伝してもらえるだろう。

これからの学校でやらなければいけない教育とは何かを考えたときに、既存の授業時間を確保しながらというのでは議論していく方策と現実とに乖離が生じるのではないか。これからの時代に必要な学びを実現していくには、例えば教科書を使用して授業する部分を少なくする、授業時間を削減するなど大胆な方策をとっていくことが必要ではないか。働き方改革を通して教員の環境や意識を変えていかないと何も変わらないだろう。

学校外での社会との関わりを充実させ、社会の一員として活躍していることを実感できる場や経験が重要であるため、生徒たちが自由にアルバイトをできるようにしていくなどして、教員も生徒も学校に長時間拘束しないという視点も必要である。

部活動への参加生徒数や活動時間が少なくなり学校の活力の喪失につながってしまうという面もあるなど、アルバイトをすることが高校生にとって一概に望ましいと言えるものではないと考える。

アルバイトをとおして生徒が学びを得られるよう、教育委員会や学校が企業側に働きかけて生徒が労働する場を調整してはどうか。

教員が全てのことをしなければならぬといった感覚を教員本人も周りの人も持っている。企業やNPOなど外部の力を活用し、地域全体で子どもたちを支えていくといった考え方や感覚を持てるようにしていくことが必要ではないか。

施設へ行って学んだりする経験が自らの勉強にとってどのような意味を持つのかを生徒自身に理解し実感させる力、外部とコーディネートする力が教員にとって必要であり、そのためにも、働き方改革をとおして教員一人ひとりの授業時間を短くしていくことが必要である。

生徒がコピーや清掃など学校の中で働くことができるようにすると、教員の負担も軽減されるし、生徒も学びを得ることができるのではないか。

#### (個別最適な学びの推進)

個別最適とは技術革新を教育にどのように活用していくかということだと考えるが、活用にあたっては、教員が生徒一人ひとりがそうした技術に向きあっていけるようにサポート・コーディネートしていける存在になることが必要である。

学校によっては自主的に学習を進めていける生徒ばかりではなく、教員のガイドや励ましを必要とする生徒、与えられるのを待っている生徒が多いのが現状のため、自らの興味関心にもとづいて探究的な学習を進めていくことは難しい。中学校の段階から勉強は自分でやっていくもの、与えられるものだけが学びではないというマインドを育てていくことが必要である。

高校においても、教員が言ったとおりに動きなさいという文化・考え方があり、そこを変えていくためにも教員自身が考えてやっていけるだけの時間を創出することが必要である。

自分に興味のあること、目的に合うことであれば自ら学習を進めていくことができるので、教員においては、生徒がそうした目標や目的を持てるよう導くことが求められる。学習を子どもたちにとって「やりたいこと」にしていくにはどのようにしていけばよいか。生徒が教員に忖度することなく本当にやりたいことを自ら学んでいけるようにしていくにはどのようにすべきかということは大きな課題である。

AI技術が進んで生徒にあった個別の学習ができるようになってきたが、それだけでは不十分である。今やっている勉強はどのような意味を持つのか、次に進むためにはどのような目標を持って勉強を進めることが必要かといったことは、教員が生徒との対話を通じてサポート・コーディネートしていくことが必要であり、やらされ感を持たれないように、目の前の学習と未来を如何につなげて見せていけるかといった力量がコーディネートには求められる。

教員の業務を生徒にもアウトソースし、生徒が生徒に教える、生徒同士が教えあうという手法も取り入れてはどうか。人に教えることで教える側においても学びの定着が図られる。

生産性を求める形で「目的」を与えてしまいがちになるが、「楽しみ」と「目的」をつなげていくアイデアが必要である。

#### 【第3回：全ての高校生を誰一人取り残さない教育環境づくり】

##### (外国人生徒への支援)

外国人だけに限らず、多様な子どもが持つリソースを活かしていけるよう入試特別枠を各地域で増やす必要があるのではないか。また、遠隔で授業を受けられるようにするなど、どこの地域・

学校でも同じような支援を受けられる体制や、子どもたちの相談に対応できる支援員的な人材を確保・充実していくことも必要である。

日本語能力試験など進路つながっていく部分について、生徒に対して先生が各々で対応していただいている状況だと思うが、これをシステム化するなど全ての学校で受けられるようになればよい。

母語での単位修得について、特に日本語での概念理解が難しい教科は1校の授業をオンラインで繋いで他校でも受講できるようにするなどして広げていけるとよい。

3年間での卒業にこだわらず生徒の状況にあわせた柔軟な単位の修得が従来の定時制以外の高校でも実施していけるようにしたり、授業への出席をマストとしない柔軟な制度にできるとよい。また、生徒がなぜその授業に出席していないのかを分析し、どうすれば出席できるかを先生や学校がサポートできる体制があるとよい。

日本人も外国人も関係なく一緒に学んでいるのが普通になり、互いに教えあい学びあえる学校にしていくべき。

外国人生徒の退学理由は勉強面だけでなく、友達がいないなどの環境面もあると思うので、周りにサポートしてくれる友達や先生がいて、受け入れられている感覚があるかどうか大きい。多文化共生・異文化理解の教育を進めていくことも重要である。また、生徒がなぜ学校を休んでしまうのかなど、その背景について理解できるように教員の資質能力を高めていくための研修等を行っていくことも必要である。

今後の支援を充実させていくためのエビデンスとするため、学校毎の支援状況や中退者数、卒業生数や退学に至った理由などを調査し、支援のあり方について検証すべきである。

単位認定や修業年数などを弾力的にしていくためには、他の生徒と一緒に学べる科目は一緒に、そうでない科目は分けるなどの生徒にあわせた取捨選択ができるようなカリキュラムの見直しが必要である。県教委が音頭をとって、柔軟なカリキュラムを示すとともに、例えば、拠点校を中心にオンライン等を使って子どもたちが学びやすい環境の整備を行うなどの仕組みづくりを行うとよい。

先生や周りの生徒が教えてくれる、生徒がお互いに教え合っているような場・システムを学校に作り、誰でも好きな時に行けるようにできると良い。また、日本の学校における試験等についても、振るい落とすというのではなく、最終的なクリアをめざして何度でも挑戦できるようにするなど、スタートで出遅れた人にとってもチャンスを掴めるようにしていく必要がある。

外国語ができて、異文化を持っているというのはその子たちの「良さ」であり、その良さを伸ばすという考え方もある。母語での授業開講にもつながることだが、中学生レベルの母語ではなく、複雑な抽象概念を母語で考えることができるようにしていくことも必要ではないか。

将来的に日本で就職を目指すのであれば、社会に出るまでに日本語でできるように徹底すべきだろう。英語か現地語を高いレベルで身につけていないと、現実的には大学や就職という面では厳しいことから、学校でも厳しくやっていくことがその子のためにもなるのではないか。

(不登校生徒への支援)

価値観の多様化が不登校の大きな要因ではないかと感じている。Bなど外部の人間でも良いので、はみ出し者でもよい、こういう風に生きていけるんだよと価値観の多様化を認めてあげることで、自分はここに居ても良いと生徒が感じられるようにすることが大切である。

不登校生徒が学校で学ぶにあたって一番必要となるのはフレキシブルな仕組みである。調子が悪いときは休みたい、調子が良いときは学校へ通って普通の高校生活をしたいと思う生徒は多い。時々であっても学校の中で過ごすことが社会的自立につながるものであることから、県立高校でもフレキシブルなシステムを考えていく必要があるのではないか。また、転学のしやすさにも問題があるため、これについてもフレキシブルな仕組みがあるとよい。

海外では、朝は元気がないような子でも登校しやすい午後の部を設けている学校もある。日本ではそういった子どもたちが通うことのできる学校が限られていることから、様々な背景の子どもたちに対応できるフレキシブルな学校があるとよい。

不登校や退学によって将来の選択肢が狭まってしまったり、不利になったりしないような仕組みを設けておくことが必要である。

それぞれの子ども生き方に応じた学びができる仕組みはだんだんと幅広くなってきているとともに不登校に対する周りの認識も少しずつ柔らかくなってきているなど、安心して不登校ができるようになってきたが、次は、そういった不登校の子どもたちががんばれるようになったときに動き出しやすい環境を整えることが必要である。

高校へ入ってからの進路変更が柔軟にできたり、高校を卒業していなくても大学へ入れたりといった仕組みの存在を生徒や保護者が知らなくては使えない。中学校段階の進路指導でしっかり伝えていくことが必要である。不登校の要因に係るデータを見ると、転入学・進級時の不適合も少なくないことから、入学した時点で違うなと感じることを少しでも減らし、そう感じた時に柔軟に進路を変更できることを知らせていけるとよい。